笠間焼の今昔マップ

茨城大学教育学部附属中学校　二年
佐々木　あすか

2

笠間焼について調べてみると昔と今で窯元の様子や作っている製品が大きく変わっていることが分かった。

江戸中期から始まった製陶は、笠間藩が産業として奨励し、文久年間(1861～1863)には6つの窯を仕法窯(藩の御用窯)に指定し、支援した。

明治以降も、田中友三郎が「笠間焼」の名をためし、組合を作って品質向上に努めるなどしたため、大いに発展した。この時代には1つの窯元が多くの職人を抱え、工場のように大量生産を行っていた。主な製品は、水がめや焼酎、すり鉢などの生活雑貨で、水戸線の開通により全国に販路をひろげた。明治44(1911)年には、21の窯元が167人の職人を抱えていた記録がある。

この地図では、江戸・明治時代から続く元の仕法窯や登り窯を持つ窯元を緑の●で示した。

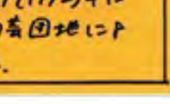
昔の製品

昔は上水道が普及していなかったので、家庭では台所に大きな水がめを置き、井戸水などを貯めて使用していた。

戦後、上水道の発達や生活様式の変化などにより、これまでの製品は売れなくなり、昭和31(1956)年には、窯元が8にまで減少した。

この時、県窯業指導所や行政が中心となり、民芸陶器への転換や多くの陶芸家を呼び育てる政策をおこなった。このため、笠間には自由な作風が生まれ、個性的な陶芸家が活躍するようになった。平成25年には107の窯元に対し従業員数は223人であり、9割以上の窯元は個人や夫婦などによる経営になっている。平成4(1992)年には伝統的工芸品に指定され、翌平成5年には陶芸家松井康成が人間国宝に認定された。

この地図では、戦後に創業した大きい(従業員5人以上)の窯元や施設は赤の●で、4人以下の窯元は●で示した。地図上には107全てを表示できなかったので、陶芸団地等の一部を示した。



今の製品

1 久野陶園：笠間市箱田1804

久野半右衛門は、享永年間(1772-1780)に信楽(滋賀県)から来た陶器職人長右衛門と窯を築き、陶器の製造を始めた。この窯は登り窯の型式を取り入れたもので、この頃から釉薬を使った焼き物(「箱田焼」と呼んでいた)ができるようになった。

文久年間には笠間藩から仕法窯に指定された。笠間焼発祥の窯であり、創業期からその子孫が変わらず受け継ぐ唯一の窯元である。登り窯を所有している。体験教室あり。

2 柏陶園：笠間市笠間2085(旧花香町)

関西地方の出身と言われる国部嘉治が創業した窯で、文久年間には笠間藩から仕法窯に指定された。その後、高橋留之助が窯主になり、現在は子孫が柏陶園、ギャラリー陶之助として経営している。

3 田中友三郎窯跡：笠間市石井台

石井村(現在の笠間市石井)出身の関根源蔵が開いた窯で、文久年間には笠間藩から仕法窯に指定されている。明治維新後、経営難となっていたこの窯を明治2(1869)年に美濃(岐阜県)出身の田中友三郎が譲り受けた。田中友三郎は明治期の笠間焼業界で指導的役割を果たした人物の一人で、笠間焼の発展に尽力した。その後、子孫の代になって、関東大震災により不景気が元で経営難となり、窯は閉鎖された。

4 製陶ふくだ：笠間市下市毛754

信楽(滋賀県)出身の国部善大が開いた窯で、文久年間には笠間藩から仕法窯に指定されている。その後、寛政8(1796)年ニホン敷布門が買い受け、その子孫が福田姓となり、現在に至る。登り窯を所有している。体験教室あり。

5 奥田製陶所：笠間市下市毛45

(笠間市)牛越出身の福田矢衛門が開いた窯で、文久年間には笠間藩から仕法窯に指定されている。その後いくつかの変遷を入て、昭和26(1951)年に奥田英太郎が買い受け、奥田製陶所とし、現在に至る。登り窯を所有している。体験教室あり。

6 月崇寺山門下広場左側の窯跡

月崇寺山門下広場の左側にあった窯で、創業時の経営者についての詳細は不明であるが、文久年間には笠間藩から仕法窯に指定されている。昭和35(1960)年に廃窯している

7 いもべ陶苑：笠間市平町1248-2

寛政7(1795)年陶工・山口善矢衛門が現・笠間市大田町で開窯、笠間焼の源流の一つ、「安戸焼」が始まる。当時は安戸藩の領内であったため、仕法窯にはなっていない。

山口家(山口松之助)は水戸線開通を機に運送業に転身、窯を磯部秋次郎に譲り、現在に至る。登り窯を所有している。体験教室あり。

8 松任陶工房：笠間市下市毛43-1

明治3(1870)年田中友三郎の工場で陶工をしていた松任浪次が創業した。環境にも恵まれた敷地は笠間で有数の広さを誇り、現存する数少ない登り窯を所有している。体験教室あり。

9 三宅陶園：笠間市寺越320

嘉永元年(1848)中洋想右衛門が創業。その後弟子の三宅重太郎にうりさ継がれた。登り窯を所有している。

参考資料
(1) 小林三郎：「笠間焼 ―陶業史―」(笠間焼陶業史出版委員会) 1967年
(2) 小田秀夫：「笠間焼」(筑波書林) 1980年
(3) 笠間市史編さん委員会：「笠間市史 上巻」(笠間市) 1993年
(4) 笠間市史編さん委員会：「笠間市史 下巻」(笠間市) 1998年
(5) 笠間市市長公室企画政策課：「統計かさま(令和元年度版)」(笠間市統計協会) 2019年
(6)「伝統的工芸品産地調査・診断事業報告書 ―笠間焼―」(財団法人伝統工芸品産業振興協会) 2003年
(7)「笠間焼200年のあゆみ」(茨城県立歴史館) 1997年
(8)「笠間の陶芸家たち」(阿部出版) 2014年
(9)「人間国宝松井康成『縄上の美』」(朝日新聞社) 1994年

10 向山窯：笠間市下市毛1372-4

昭和45(1970)年の創業。常に10名以上の陶芸家が、社内の工房においてそれぞれの個性を発揮して作陶をしている。国が認定する笠間焼伝統工芸士も5名所属している。

11 月崇寺：笠間市笠間350

江戸時代から、境内に窯があり笠間焼と関係が深い寺。昭和35(1960)年にはこの寺の住職でもあり、のちに人間国宝になった松井康成(1927-2003)が寺に窯を復興した。

12 茨城県立笠間陶芸大学校：笠間市笠間2346-3

昭和25(1950)年に設立された茨城県窯業指導所が前身。戦後、生活様式の変化などにより、笠間焼きの主要製品であった水がめやすり鉢などが売れなくなり、笠間焼には厳しい状況になった。この時、茨城県窯業指導所が中心となり、茶器や食器などの民芸陶器への転換の指導、最適な陶土や釉デザインの研究などを行った。また、多くの陶芸家を育てるとともに、陶芸団地や窯業団地の造成などにも関わり、現在の笠間焼の基礎を作った。平成7(1995)年現在地に新築移転した。

13 陶芸団地　14 芸術の村　15 窯業団地

デザインカを持った陶芸家を笠間に呼び、笠間焼のデザインに新鮮な感覚を取り入れることを目的に、窯業指導所が中心となり笠間市の援助を受けて昭和39(1964)年陶芸団地を造成した。その後昭和41(1966)年に芸術村が開村、昭和47(1972)年に窯業団地が造成された。平成7(1995)年には、陶芸団地に8、芸術村に11、窯業団地に16の窯が操業している。